

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：32410

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330229

研究課題名(和文) 日本統治下台湾・朝鮮の学校教育と周辺文化の研究

研究課題名(英文) Study on School Education and Cultures around the Schools in Taiwan and Korea under the rule of Japan

研究代表者

佐藤 由美 (SATO, YUMI)

埼玉工業大学・人間社会学部・教授

研究者番号：10399123

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,400,000円、(間接経費) 2,520,000円

研究成果の概要(和文)：日本統治下の台湾や朝鮮では、学校教育を受けることのできる子どもたちは限られていた。その機会に恵まれた子どもたちでさえも、その期間は限定されていたが、子どもたちは学校以外でもさまざまな学びを経験したはずである。

そこで私たちは学校教育以外の場で、子どもたちがどのような学びを経験したのか、その様相に焦点を当て多様性を明らかにした。例えば、社会教育(伝統教育機関、夜学や国語保育園など)、サブカルチャー(児童文学、紙芝居、ラジオ、労働、遊び)の中での彼らの学びである。資料としては、当時の政策文書や新聞雑誌、インタビュー調査の記録を用いた。

研究成果の概要(英文)：A child does not learn only in schools. Especially, in Taiwan and Korea under the rule of Japan, there were not a few children who did not have any opportunities to go to school. That is why we focused on their learning not only in formal educational institutions but also in informal institutions, for example, night classes as a form of social education. In addition to that, we focused on a variety of cultures or subcultures by the mean of which children might have learned, such as literature, magazines, music, theater for children, and radio programs, Kamishibai (street performances using short picture stories) and so on.

And based upon historical records, such as education policy documents and journals, and interviews we had with persons concerned, we revealed that the children at that period learned with difficulty, pursuing every possibility of learning.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育史

キーワード：教育史 台湾 朝鮮 学校教育 社会教育 伝統教育 児童文化

1. 研究開始当初の背景

(1)日本統治下の台湾・朝鮮教育史研究は、従来、学校教育を中心に行われてきた。近年になって、宮崎聖子『植民地台湾における青年団と地域の変容』(2008)や李正連『韓国社会教育の起源と展開』(2008)が、総督府の教育政策は学校だけが舞台ではなかったことを社会教育の分野から実証的に明らかにした。また、呉成哲は『植民地初等教育の形成』(2000)のなかで、普通学校の全体就学率は、1930年が17.3%、35年が23.4%、40年が38.2%(133頁)であり、総督府が主導する学校教育が一般の子どもたちに及ぼした影響については再検討の余地があることを明らかにしている。さらに被植民者の主体性の視点から日本統治下の教育実態を解明する研究も盛んになっている。小熊英二・姜尚中『在日一生の記憶』(2008)や白宗元『戦争と植民地の時代を生きて』(2010)などのように、日本統治下で学齢期を過ごした経験者の証言をもとにした研究が誕生している状況だ。

(2)研究代表の佐藤は、2002年より台湾、朝鮮出身の日本(内地)留学経験者に、質問紙及びインタビュー調査を開始し、その成果を数篇の論文にまとめてきた。これらの研究から得たのは、教育政策と実態との差、学校教育が子どもたちの生活環境に影響を及ぼした部分とそうでない部分(家庭内での言語や伝統的な遊びの継承など)があったこと、その様相は皇民化政策の前後で大きく変わること、台湾と朝鮮では異なることなどであった。研究分担者の玄も、済州島、Seoul、大阪でインタビュー調査を継続して行ってきた。玄は学校教育を受ける機会の少なかった女子や済州島の地域性にも注目している。

(3)さらに、本共同研究のメンバーの多くが参加した基盤研究(B)「植民地期東アジアにおける近代化と教育の展開 - 1930年代 -

1950年代 - 」(研究代表：磯田一雄,平成18~20)では、被植民者の視点で、日本・台湾・朝鮮を横断的にみることで、それぞれの地域の伝統や文化に裏打ちされた「近代化」と教育の諸相が浮き彫りになってくることが確認された。学校教育だけで完結する教育史ではなく、学校の周辺で台湾や朝鮮の人々が意図的、無意図的に、または能動的(主体的)、受動的に、どんな教育を受けたのか(日本的な文化が伝承されたのか)、あるいは受けなかったのか、学校教育と周辺文化がどのような関係・構造で機能していたのかを明らかにする必要があると認められた。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、日本統治下(1930年代以降)の台湾・朝鮮社会のなかで、学校教育と周辺文化(児童文学や音楽、幻燈会や紙芝居、少年少女向け雑誌、ラジオ番組、遊び、労働、或いは家庭での躾や仲間との関係など)がどのような関係・構造で機能していたのかを明らかにすることである。

(2)具体的には以下の諸事項を明らかにすることを目的とする。1930年以降の学校教育(政策・制度・カリキュラム・教育内容など)及び学校文化(学校で身に付けた習慣や隠れたカリキュラム)1930年以降の就学率の変遷 就学年齢人口のうち学校教育の対象と対象外の子ども 学校以外の機関、組織、それと関連した子どもたちの日常生活 学校教育と社会教育及び伝統教育との関係

(3)また、学校教育の周辺で子どもたちにもたらされた近代教育(あるいは皇民化教育)や日本的な(宗主国の)文化、その媒体や内容は具体的にどのようなものだったのか、さらには、それらが子どもたちにどのように受け取られたのかを(2)で述べたことと並行して明らかにしていく。これら周辺文化の媒体として検討したいのは以下の項目である。

児童文学（童謡・短歌などを含む） 音楽（歌謡・唱歌） 幻燈会（映画）や紙芝居 少年少女向け雑誌（『少年倶楽部』、『少女倶楽部』など） ラジオ番組 遊び 労働

(4)さらに、(2)と(3)を踏まえて、学校教育と周辺文化の構造を以下の諸点から分析し解明する。 学校教育で教え伝えられたことと、周辺文化がもたらしたものの差異は何か。

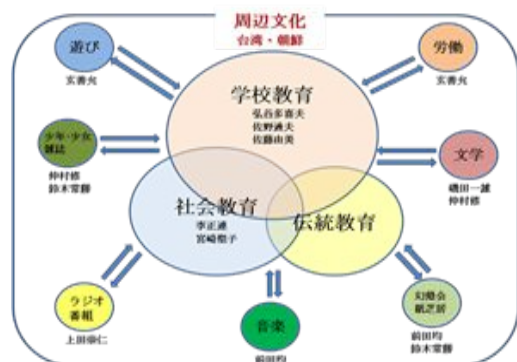
周辺文化はどの範囲、階層の子どもたちに及んだのか。 周辺文化と学校教育の関係、それは補完関係にあったのか、或いは前者が後者の先導役を担ったのか（その逆か）、また、その構造はどうなっていたのか。 上記

から について、皇民化政策の前後でどのような違いがみられるか。 上記 から について、台湾と朝鮮でどのような差異があるのか。

3. 研究の方法

(1)研究方法は文献研究を土台にし、被植民者の視点を加えるために質問紙調査や面談調査をメンバー各自が行う。研究体制として、東アジア教育文化史研究会（学校教育、社会教育、児童文化を専攻する研究者のコラボレーションで成る）を組織し、合宿研究会や公開シンポジウムを開催し、議論を深める機会を設ける。

(2) 研究会としては以下の計画と役割分担を行い、研究を進めることになった。



< 1930 ~ 45 年の台湾・朝鮮における学校教育

と子どもたちの実態> 学校教育（政策・制度・カリキュラム・教育内容など）と学校文化 就学率の変遷 学校教育を受けた子どもたちと受けなかった子どもたち 学校以外の教育機関・組織はあったのか 子どもたちの日常生活の把握 社会教育や伝統教育と学校教育の関係はどうなっていたか

< 1930 ~ 45 年の台湾・朝鮮の子どもたちを取り巻く周辺文化 媒体と具体的な内容 >

文学（童謡・短歌などを含む） 音楽（歌謡・唱歌） 幻燈会（映画）や紙芝居 少年少女向け雑誌 ラジオ番組 遊び 労働、或いは家庭でのしつけや仲間との関係

< 学校教育と周辺文化の構造 >

4. 研究成果

(1)本共同研究の成果は、研究成果報告書『日本統治下台湾・朝鮮の学校教育と周辺文化の研究』として2014年3月25日に編集・発行した。報告書にはメンバーのほか、ワークショップ（2013年11月9日実施）で発表を依頼した呉宏明氏（京都精華大学）の論稿も掲載されている。報告書では共同研究から得た総合的な知見を研究代表の佐藤由美が「序説 日本統治下台湾・朝鮮の学校教育と周辺文化」と題して巻頭でまとめ、以下、学校教育、社会教育、伝統教育、周辺文化の順に個別論文が収録された。

< 目次 >

序説 日本統治下台湾・朝鮮の学校教育と周辺文化 佐藤由美
 躰と学校教育 - 台北市建成国民学校「国民学校設営の概要」の分析 - 弘谷多喜夫
 日本統治下台湾における書房と公学校 - 1933年 ~ 1945年までを中心に - 呉宏明
 植民地期台湾における幼児と日本文化・日本語 - 国語保育園を中心に - 宮崎聖子
 植民地期朝鮮における不就学児童と夜学 -

1930～40年代夜学経験者のオーラルヒストリーをもとに - 李正連
不就学女性の生活の中での「学び」 - 植民地下の朝鮮済州島で生まれ育った女性のライフヒストリーと「学び」 - 玄善允
日本統治期台湾中等学校における周辺文化としての短歌 磯田一雄
朝鮮児童文化（1930～45）の研究

仲村修

ラジオが教えた日本語 - 学校教育の周辺での日本語教育 - 上田崇仁
日本統治下の朝鮮、台湾での国策紙芝居 鈴木常勝
それぞれの論稿が明らかにした点は以下の通りである。

(2)まず、弘谷多喜夫の「賤と学校教育」では、台北市建成国民学校編『国民学校経営の概要』を史料として、大正期には家庭で行うものであった賤が国民学校令下では、「礼法や道徳の基礎を訓練するものとして、学校教育に位置付けられた」ことを明らかにした。

(3)次いで、宮崎聖子が国語普及事業の一つである「国語保育園」（便宜上の呼称）を取り上げた。国語保育園は、「1930年代半ば頃より漢族系住民に対して実施され、台湾全島に普及した」施設で、日本（内地）の「農繁（期）託児所をモデルに創設」された。「1943年において全島で7万人、施設数は1979か所と言われ」ている。州によって対象児童の年齢や保育期間、内容は異なるが、国語に慣れ親しませることや生活習慣、衛生管理などが行われていた。国語保育園の園長は公学校の校長や地方の名士、保育には公学校の女性教員や女子青年団員が当たっていた。宮崎は1930年代半ば以降の国語保育園は、「公学校／国民学校と密接に結びついた、台湾人教化の最尖鋭の形」であったと分析している。

(4)呉宏明は書房について論じた。1933年から45年は書房教育「撲滅政策」の時代で、1932年には書房の新規開設が禁止となり、1939年には書房廃止が決定され、台湾総督府の統計では1941年度の書房数は7校、生徒数は254名となっている。しかしながら、台湾社会には未公認の書房が存在しており、公学校のない地域の教育、または公学校との二重教育を担っていたことが確認されている。

(5)李正連は朝鮮の「夜学」を取り上げた。夜学は3・1独立運動後に増加し、多くの不就学者、不就学児童に学びの機会を提供した。官側の夜学は国語の普及、民側はハングルの普及や民族教育を中心に行ったが、李はさらに詳細な実態に踏み込んで、「不就学児童の夜学での学びの実態」を夜学経験者のオーラルヒストリーをもとに明らかにした。「夜学で学んだことが、学校の勉強に役立つばかりか、夜学の教え方が学校のそれよりもおもしろくてよかった」、「そこ（夜学）に集まって遊ぶ楽しみで毎日通ったね。村の前に森があったんだけど、そこに出かけて歌ったりしたの」といった発言は、学校教育と社会教育そして周辺文化の併存関係をよく示している。

(6)玄善允は、1924年に済州島下道里で生まれ育った女性のライフヒストリーを通じて不就学女性の生活の中での「学び」について取り上げた。同じ済州島であっても、済州島の中心街である済州と下道里という漁村の地域差、男性と女性の差、国民学校と夜学との「学び」の違いなど、全く異なる様相を呈していることが示された。

(7)磯田一雄は台湾の中等学校における短歌の作歌活動を取り上げた。日本独特の文化である短歌を、台湾の子どもたちはどのように受け取ったのだろうか。磯田は「台湾人の間で短歌や俳句が急速に普及した時期が、皇民

化運動と重なっている」ことを指摘し、台湾総督府学務課の『皇国の道』（1942年6月発行）に掲載された青少年の短歌を事例に「権力による作歌を通じての皇民化という側面を保ちながらも、短歌を作る力量を相当に持つようになってきていること」を認め、しかしながら「どこまで自主的な自己表現でありえたか」、さらには「日本語短歌に文芸的表現様式としての普遍性」があるかという問題を提起している。

(8)仲村修は1930年から45年までの朝鮮児童文化全般を考察するために、朝鮮の少年運動、セクトン会の活動、少年少女雑誌、京城放送局の「オリニシガン（子どもの時間）」を取り上げた。いずれも官側ではなく朝鮮人主体の団体であり活動である。この時期は「映画・ラジオ・レコードといった近代をもっとも象徴するツールが本格稼働を始める時期でもあった」が、皇国臣民化の諸政策に伴って朝鮮の独自の児童文化が「風前の灯」となっていく時期でもあり、学校教育とは「水と油のように混じり合うこと」のない「周辺文化」が描かれている。朝鮮の児童文化をリードした方定煥は識字の子どもたちには雑誌『オリニ』で、非識字の子どもたちには口演童話で接近した。但し、こうした朝鮮人主体の周辺文化が、子どもたちにどの程度まで届いていたのかは定かではない。

(9)上田崇仁は朝鮮でのラジオの語学講座『ラジオ子供のテキスト』の分析を行った。京城放送局は1926年に予備放送を、翌年に本放送を開始しており、語学講座も開設当初から始まっていたものと推測される。上田は「国語」教育とラジオの関係について「相互に直接的な連携は見られないものの、学校に通う子供達にとっては学校教育の補完的な役割にとどまらず、娯楽を理解したいという動機付けの場として、学校教育を受けた人た

ちにとっては実用的な情報獲得の場としての意味だけでなく継続学習の場として、学校教育を受けていない人々にとっては日本語学習のきっかけを得、実質的な学習へと結びつける場としての機能を果たす、あるいは果たすことを期待されていた」と推察している。

(10)鈴木常勝は本研究の過程で発掘した4編の国策紙芝居の紹介を通じて、日本統治下の朝鮮、台湾における国策紙芝居の普及について論じた。発掘したのは朝鮮総督府情報課指導の『かはいゝ孫娘』（昭和17年7月21日発行）と『半島の陸鷲』（昭和18年7月25日発行）、それに台湾で徴兵制度の施行に伴って制作された『曙の母』（昭和18年12月17日発行）と『捧げる真心』（昭和18年）である。いずれも戦時下に国語常用や徴兵制の普及を目的に制作されたものであり、官側の社会教育のツールとしての役割を果たしている。

(11)これら個別の論稿から私たちが得たのは学校教育と周辺文化の多様な関係性である。それらは以下の3点に集約できた。

学校教育を中心に関連し合う社会教育・伝統教育と周辺文化

学校教育に取り込まれる周辺文化

子どもを取り巻く文化の一つが学校教育

(12)植民地をめぐる支配国と被支配国の関係、そしてその研究は「二項対立」の構造からはなかなか自由になりにくい。まずは事実として、如何ともし難い「二項対立」の構造が底辺に横たわっている。しかし、研究者の側が「二項対立」の文脈に縛られ、それを絶対的なものとして、日本統治下の台湾、朝鮮の子どもたちの周囲で起こる諸事象をすべてその枠組みに位置付けていったとしたら、実態は何も見えて来ないであろう。そのような意味において「二項対立」の図式には囚われない実態重視の研究手法を用いてきた。

その結果、学校教育や社会教育を含んだ周辺文化の諸相が、従来より鮮明に浮かび上がってきた。研究者の側がこれは学校教育の研究、これは社会教育の研究と垣根をすることで、個々の子どもの経験は、そのままのものとしてではなく、分解して捉えられていくのだということに改めて気付かされた。それはインタビューを通じて教えられたことでもあった。今回の共同研究の過程で得た、子どもの生活空間を見るセンスは、今後の研究に活かされるものである。

(13)なお、研究成果報告書には研究資料として学校教育と周辺文化に関するインタビュー記録を5本、収録している。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 43 件)

宮崎聖子「日本植民地期台湾における子どもの『保育』と『母性』」「母性衛生」査読無 54 巻 1 号 2013 年 25~29 頁

磯田一雄「日本統治期朝鮮と台湾における日本語俳句受容の比較研究序説」『東アジア研究』査読無第 61 号 2014 1~15 頁

佐藤由美「日本統治下朝鮮における学校経験 - 永井昭三氏の場合 - 」『日本植民地教育史研究年報』査読無 16 号植民地教育ジェンダー 2014 104~114 頁

宮崎聖子「植民地台湾における国語保育園」『南島史学』査読有 70・80 合併 2013 160~170 頁

[学会発表](計 22 件)

宮崎聖子「植民地時期台湾における国語保育園 - その具体的諸相」台湾歴史学会、台湾史研究会共催シンポジウム 2013 年 9 月 6 日 国立台湾図書館

磯田一雄「皇民化期におけるある台湾人の俳句習得過程の実際」天理台湾学会 2013 年 6 月 29 日 天理大学

宮崎聖子「植民地期台湾における在日日本人の社会教育推進者について - 横尾広輔を例に」台湾史研究会例会 2012 年 4 月 1 日 関西大学経営研究棟

[図書](計 6 件)

佐野通夫 龍溪書舎 『日本植民地教育政

策史料集成(台湾篇)第9集(解題)』 2011 年 39 頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐藤 由美 (SATO, Yumi)
埼玉工業大学・人間社会学部・教授
研究者番号: 10399123

(2)研究分担者

玄 善允 (Hyun, sunyoon)
大阪経済法科大学・アジア研究所・教授
研究者番号: 80388636

(3)連携研究者

弘谷 多喜夫 (HIROTANI, Takio)
浜松学院大学短期大学部・教授
研究者番号: 30140990

佐野 通夫 (SANO, Michio)

こども教育宝仙大学・こども教育学部・教授
研究者番号: 20170813

李 正連 (Lee, Jeongyun)

東京大学大学院・教育学研究科・准教授
研究者番号: 60447810

宮崎 聖子 (MIYAZAKI, Seiko)

福岡女子大学・文学部・准教授
研究者番号: 70401601

磯田 一雄 (ISODA, Kazuo)

大阪経済法科大学・アジア研究所・客員教授
研究者番号: 20052235

仲村 修 (NAKAMURA, Osamu)

大阪経済法科大学・アジア研究所・客員研究員
研究者番号: 70534486

鈴木 常勝 (SUZUKI, Tsunekatsu)

大阪経済法科大学・アジア研究所・客員研究員
研究者番号: 30534482

前田 均 (MAEDA, Hitoshi)

天理大学・国際学部・准教授
研究者番号: 70165653

上田 崇仁 (Ueda, Takahito)

愛知教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 90326421